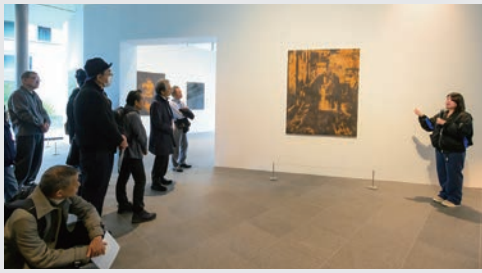
若手アーティストが育つ魅力ある大阪に

大阪中之島美術館×関西・大阪21世紀協会 共同企画

Osaka Directory

おおさかディレクトリ

supported by RICHARD MILLE



小谷（こたに） くるみ 展

第４期 2023年11月18日〜12月17日

小谷くるみ／1994年大阪府生まれ。2017年京都造形芸術大学油画コース卒業。2019年京都造形芸術大学大学院修士課程修了。大学院在学中から大阪や東京で個展を多数開催。

虚実が交錯するミステリアスな世界

存在の痕跡や気配をコンセプトとする「21g（グラム）」シリーズなど、今回のための新作８点を含む絵画作品10点が披露されました。

「21g」シリーズの《見えない山》や《対岸》は、結露した窓ガラス越しにおぼろげに見える風景と、結露面を指でなぞった落書きのようなストロークを写実的に表現した絵画作品です。シリーズ制作のきっかけは、大学院時代に本で読んだ〝人の体重は死の瞬間に魂の重さである21g分減る〟という説と、霊的な存在が湿った窓にメッセージを残すホラー映画のワンシーンが自身の中で結びついたことでした。「魂は目に見えず、あるかないかも分からないのに、人々はまるでそれが存在するかのように生活している。スピリチュアルなものに名前を付けたり、重さを測ったりして、その存在に意味を付けようとする人の欲のようなものが面白い」という小谷さん。作品が全体に青っぽいのは、映画『仄暗い水の底から』（2002年／日本）を観て、その映像が青いフィルターをかけて不気味さを演出していることから着想したものです。目に見えない恐怖をジメジメとした湿気で暗示する日本のホラー映画特有の心理描写が好きで、小谷さんが描く〝結露〟からも、そうした何ものかの〝気配〟が伝わってきます。

《ただここに在る》は、鉄の錆を〝絵の具〟としてキャンバスに染み込ませ、時間の変化や事物の痕跡を象徴的に表現する「時間・痕跡〈錆〉シリーズ」の一つ。映画『Stalker（ストーカー）』（1979年／ソ連）のワンシーンを描いたもので、〝ゾーン〟と呼ばれる願いが叶う場所へなかなか辿り着けない登場人物の苛立ちが、作品のテーマを追い求めていた自身の焦燥感と重なって制作につながりました。

自身初の美術館での個展について、「私のことを全く知らない人や現代美術となじみのない人にも観ていただけるし、こうしたテーマを面白いと感じてもらえれば嬉しい」と小谷さん。虚構と現実が交錯する小谷さんのミステリアスな世界観に、多くの人が足を止めて見入っていました。

《ただここに在る》2020年
鉄錆（赤錆、黒錆）、綿布、パネル／162×130cm

《見えない山》2023年
アクリル、綿布、パネル／230×420cm
久しぶりに訪れた故郷（大阪府交野市）の風景。巨石信仰のある山の風景が高速道路によって隠れてしまったが、そこに聖なる存在の気配を感じて制作。大きなキャンバスに写真を投影して描き、ストローク部分をマスキング（最後に除去）した後、スプレーで結露感を表現している。

《対岸》2023年
アクリル、綿布、パネル／116.7×91.0cm

関西・大阪21世紀協会は、関西の若いアーティストの活動を支援するため、大阪中之島美術館と協力し、多くの美術愛好家が訪れる美術館のフリースペースでアーティストの作品を個展形式で紹介する「Osaka Directory supported by RICHARD MILLE」を開催しています。２年目となる2023年度（第４～６期）は、20代の実力ある３名のアーティストを取り上げました。２万７千人を超える来館者が鑑賞し、彼らの現代を象徴する新たな表現が注目されました。

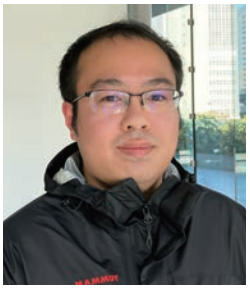
当協会はこの取り組みを通して、国内外から「アーティストが育つ、活気と魅力のある都市」として認知され、地域の賑わいに貢献することを目指しています。

肥後（ひご） 亮祐（りょうすけ） 展

第５期　2023年12月23日～2024年１月21日

肥後亮祐／1995年北海道生まれ。京都市立芸術大学大学院博士（後期）課程構想設計領域在学。「Kyoto Art for Tomorrow 2021 –京都府新鋭選抜展– 優秀賞」（京都文化博物館、京都／2021年）など受賞。

ブロンドの記譜法

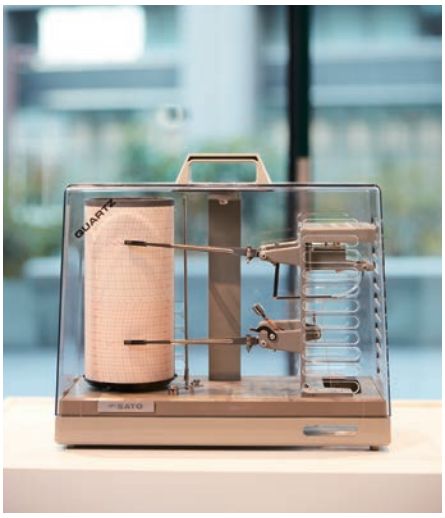


社会や個人が無自覚または意図的につくりだす虚構とその伝播を考察・作品化している肥後さん。本展覧会では、美術館などに設置される「毛髪式温湿度計※」を起点に、湿度を数値化する装置に人体の一部である毛髪が介在することで、自身が抱いていた無機質な計測器の基準が乱される感覚をコンセプトとする作品が展示されました。

「毛髪式温湿度計はモノに過ぎないが、人々はそれが示す数値に動かされているといえるのではないか。言い換えれば、温湿度計に使われたブロンドヘアという奇妙な基準によって議論が発生し、行動が促されているように思えた」という肥後さん。会場では、毛髪式温湿度計やスイス人科学者のオラス＝ベネディクト・ド・ソシュール（1740～1799年）による毛髪式温湿度計の起源ともいえる論文「湿度測定法に関する試論」の初版本（1783年）、ソシュールと毛髪式温湿度計が描かれた「20スイス・フラン」、ソシュールがモン・ビュエ山頂でスケッチしたアルプスの山並みをもとに、作家のマルク＝テオドール・ブーリ（1739～1819年）に描かせた360度パノラマ図、グーグルアースをもとに制作した映像作品《モン・ビュエ》などを展示。さらに、５名の話者が毛髪式温湿度計をきっかけに語り合った様子を、円卓や話者たちが座っていた椅子の高さ、それを撮影したカメラ位置などを再現して〝座標〟とみなし、〝見えないものの状態を探る装置〟として提示したインスタレーション作品《ブーリは道を知っている》が新たに制作されました。

毛髪式温湿度計は、歯車が作動するたびに「カチッ」という音がします。肥後さんは、それが音楽のテンポのように聞こえ、湿度を示すグラフが譜面のように見えたことから、作品全体のテーマを《ブロンドの記譜法》と名付けました。毛髪式温湿度計をめぐる品々や作品はそのテーマの素材であり、展示品すべてをもって１つの「作品」とみなす構成になっています。

※毛髪式温湿度計……毛髪が吸湿と脱湿により伸縮する性質を利用した温湿度計。メーカーによっては、フランス少数民族の女性の毛髪が使用されているものもある。



毛髪式温湿度計（シグマⅡ型 温湿度記録計）

会場は、本展の起点となった毛髪式温湿度計（左奥）から順に、ブーリが描いたパノラマ図や、ソシュールの論文、新作《モン・ビュエ》が並ぶ。

《ブーリは道を知っている》2023年

木原（きはら） 結花（ゆいか） 展

第６期　2024年１月27日～２月25日

木原結花／1995年大阪府生まれ。2019年大阪芸術大学大学院芸術研究科博士課程前期修了。大阪芸術大学写真学科平成28年度卒業制作展学長賞（2017年）。関西、関東の展覧会に多数出展。

社会の周縁に消えた人たちを仮構

氏名や戸籍などが判明しない身元不明の遺体は「行旅死亡人（こうりょしぼうにん）」といわれ、その容姿や所持品などの情報は官報や新聞で公告されています。木原結花さんは、そのわずかな文字情報をもとに生前の姿をフォトモンタージュで作成し、遺体が発見された場所の風景と合わせて、あたかもそこで撮影されたようなポートレート写真を制作しています。

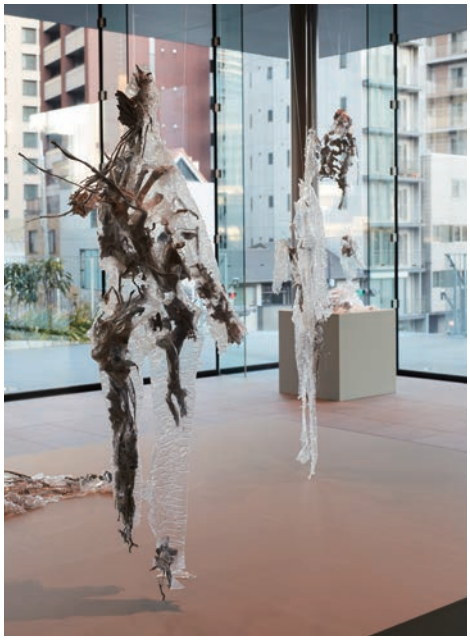
制作のきっかけは、大学の授業で行旅死亡人について知った際、小学生の頃、夏休みにホームレスの男性と親しくなったものの、夏休みが終わってその人と遊ぶことがなくなり、やがて顔も忘れてしまっていた自身の経験を思い出したことでした。

本展覧会では、遺体が発見された現場の太陽光で感光し、そこで水洗現像して乾燥させた「サイアノタイプ（ネガフィルムに感光材を塗った画用紙を重ね、紫外線で感光させる青写真）」による等身大の作品も出展されました。木原さんは、「彼らが薄れゆく意識の中で感じたであろう太陽の光や風の感触なども記録できないかと考えた。そうした物理的な刺激も、彼らの人生を構成する要素だったから。社会の周縁に消えた名前も顔も分からない人たちを捉えるには、こうして仮構するしかない」といいます。

新作《そこにいるはずだったあなたの。世界にはない現象であなたの形を作成する》は、あるアニメの聖地（海辺）に赴き、その場でシリコン型に「UVレジン（紫外線硬化樹脂）」を流し込んで固めた作品。アニメと現実世界が違うことは承知の上で、キャラクターたちも自分と同じ日焼けの痛みを感じたかもしれないと信じるしかない祈りの行為だったと振り返り、「大阪中之島美術館という大きな舞台での個展の開催はとてつもない挑戦で、鑑賞に耐えられる作品が創れるのか自身との葛藤の日々だったが、制作を進めるにつれ、次はこうしたい、ああしたいという思いが湧き上がってきた」と笑顔で語ってくれました。

《行旅死亡人（兵庫県姫路市飾磨新西防波堤灯台付近）》2017年
サイアノタイプ／180×50cm

《行旅死亡人》2016年
新聞の切り抜き、写真／各22×27.3cm、
10点組のうちの２点



《そこにいるはずだったあなたの。世界にはない現象であなたの形を作成する》2023年
紫外線硬化樹脂（UVレジン）・シリコン、インスタレーションサイズ可変

主催：大阪中之島美術館、関西・大阪21世紀協会
supported by RICHARD MILLE
協賛：サントリーホールディングス株式会社、ロート製薬株式会社、大和証券株式会社、西日本電信電話株式会社、ダイキン工業株式会社、株式会社丹青社

※Directory（ディレクトリ）は、英語で「名鑑」、IT用語でデータを整理・分類する「フォルダ」を意味する言葉。本シリーズを通して、将来活躍が期待される関西の若手アーティストの情報を美術館というディレクトリに格納・保管するとともに、彼らの活動を広く紹介し、世界に羽ばたくことを支援する。第１期～第３期は2022年８月～2023年２月に開催。